



菊の花

佐佐木 邦子

葬儀に用いられる花は白い菊が多い。花輪だけでなく、参列者たちがお棺に一輪ずつ菊の花を入れ、死者との別れを惜しんだりもする。白い花なら何でもよさそうなものなのだが、メインはどうしても菊でないと落ち着かない。

暮らしの中の菊は、死よりも生をいりどるように感じられる。代表的な秋の花だ。大輪の見事なものから小ぶりの愛らしいものまで、季節になるとたくさん咲く。自分の庭の菊だけでは物足りなくて、少し前はお弁当を持ってよそに見に行く人も多かった。春の花見が桜ならば秋の花見は菊で、「菊見に行く」という言葉がごく普通に使われていた。

菊の花で作った菊人形、丹精した花を持ち寄っての品評会などは、今もあちこちでなされている。

スーパーでは花をパックにして売っている。熱湯でさっと湯がいて甘酢で食べるとおいしい。葉を天麩羅にしたり、小さな黄菊を刺身や焼き物に添えたりと、工夫次第で料理が一段と華やかになる。山形県の「もってのほか」の名は、昔この菊を食べた殿様が「こんなおいしいものを庶民が食べるとはもってのほかだ」と怒ったことから付いたとか。そんな逸話をまことしやかに作ってしまうほど人はユーモアがあって商魂たくましく、菊は食材としても親しまれていた。

そのほか中国では九を縁起のいい数字とし、九が重なる九月九日（旧暦）を重陽の節句として祝った。この日に菊の花を浮かべた酒を飲むと長生きするそう。菊が長命を表す故事も多い。新潟県には、野生の菊が咲き乱れる谷から流れる川がある。菊の露が川にしたたり落ちるので、この水を飲むと長生きするとか。この川の水で作った酒も有名だ。

めでたい花である菊が葬儀に使われるのは不思議な気もするが、宮城県南の旧家で二十三夜講の掛け軸を

見せてもらったことがある。月と菊理姫が描いてあった。民俗学者の折口信夫は「菊理」は「くくり」で水を潜ることだと説明している。死の世界から戻ってきた伊弉諾尊を楔ぎ払いしたのが菊理姫だった。菊の露、菊から落ちる水が強調されるのも、楔ぎと関わりがあると思われる。

黄泉の坂で生と死を分ける。菊は本来そんな神秘的な力を持っていた。桃酒、菖蒲酒、菊酒は魔を遠ざける特別な酒とも言われる。今年の重陽は新暦の十月十九日だ。盃に菊を浮かべてみるのも風情があるかもしれない。

2007.10 こもれば第4号